

# NVC Monthly



寝屋川映像同好会会報

第70号(201505)

発行 竹田 幸男



3月22日開催の映像協会合同例会（既報）風景

## 例会の窓

### 平成27年4月例会

日 時：平成27年4月8日（水）

13：30 市民活動センター  
4F 子ども部屋

出席者 新井 竹下 竹田 谷 田淵 小笠原

欠席者3名 (50音順・敬称略)

### 例会次第

1. 各会員の最近の活動状況・情報交換
2. 報告・連絡・協議事項
  - (1) 会報筆者 谷さん
  - (2) 映像協会総会の報告（3月22日実施）
    - ・映像協会の昨年度の活動報告と今年度の活動計画をパワーポイントで説明
    - 今年度の協会の活動目標は「少子高齢化の時代に対応し映像制作を通じて会員の生きがいつくりと仲間づくりを推進する」であり、時期別に具体的な年間計画を提示した。（詳細はレジュメ配布）
  - (3) 今年の同好会の運営について

- ・前項の映像協会総会に関連して、今年度の同好会の活動も共通する部分はこの活動予定に沿って運営したい。

(4) 同好会ビデオ作品発表会の反省(3月14日実施)

- ・今回、雨でもあったが来場者が少なかったので今後のPRの方法、人集めをどうすればいいか課題。  
次回は早めに松愛会の新聞にも入れてもらう。
- ・次回の運営について(省略)

3. 第10回寝屋川映像フェスティバルが来年3月19日(土)に決定  
出来るだけ今年中に作品の準備を。

4. 作品映写

(1) 笠商の同窓会 部分 小笠原さん

- ・久しぶりの同窓会に故郷の風景や今の街の姿を取り込んで編集された。同窓生全員にこのDVDをプレゼントされたとのこと。

(2) オオムラサキを守る会 小笠原さん

- ・(米原市 多和田)日本の国蝶「オオムラサキ」を守る会の活動と、会のイベントを撮影したドキュメンタリー作品、この蝶をもっと身近に見ることができればと願う。子供たちがうたう「オオムラサキ」の唄がよかった。  
2作に共通する課題は取り込んだ静止画の1枚あたりの時間を短縮したい。

(3) 神峯山寺の紅葉 7分 谷さん

- ・さすがハイビジョン、紅葉が美しい。画面に川柳が挿入されているが、自然の風景と人間関係の風刺が効いた川柳はなじみにくいように思われる。  
入れるなら俳句や短歌か。  
川柳は人間が行き交う都会風景に合うのではないか。

5. 来月の開催日 5/13(水) 13時30分 4Fワーキングスペース



## 私 と 金 剛 山

谷 弘 子

歩こう会に入って初めて金剛山に登りました。1回登るごとに1回押印してもらって約7年が経過しています。最初は年に2回か3回でしたが、回数は年毎増えていきました。

毎年2月には、二十数人でぜんざいを頂きながらの楽しい雪中登山。友人宅で1泊しての登山。夏には、孫と一緒にサワガニを探しながらの登山。友人や家族

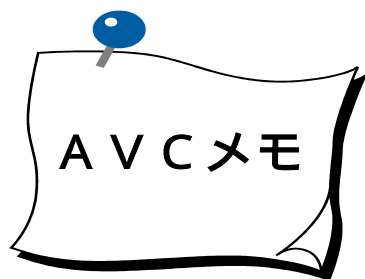
と一緒に登山。一人登山。四季折々の景色やいろんな花や野鳥にであいます。

花ではカタクリ、ニリンソウ、クリンソウ、エンレイソウ、ヤマシャクヤク他、野鳥では、ヤマガラ、シジュウカラ、コガラ、ゴジュウカラ、ミソサザイ等。写真撮影やビデオ撮影もします。最近では、カケスの写真を撮ることができました。登る毎に、何か発見があります。

膝を痛めたり アキレス腱を切断したりして登れない日々もありましたが、昨年7月には、50回登山となりました。この日は主人と娘と一緒に登ってくれてビデオ撮影をしました。窓口の係の方がベルをならしながら「おめでとうございます。」と言って下さいました。嬉しかったです。

でももっとすごい1000回、5000回、10000回の方もいらっしゃいます。ハイキング部では、2年前に100回を越えました。

もう一つの歩こう会は、今年中に100回をめざして記念のバッジを楽しみに参加したいと思います。あと何年かかるかわかりませんが、私は、金剛山の登山回数100回をめざしたいと思います。



## ズームレンズとバリフォーカルレンズ

竹田 幸男

ズームレンズ、というのは、よく聞く言葉ですが、バリフォーカルレンズという言葉は耳慣れない言葉ではないかと思えます。ところが、本当のズームレンズ、というのはあまり存在せず、ズームレンズといわれていたものが、実はバリフォーカルレンズであった、というのが、現在の実情ではないかと思えます。

映像雑誌ビデオサロン2015年5月号の「交換レンズの基礎知識」という記事の中に、「・・・ズームレンズとは焦点距離が変わってもフォーカスがズレないレンズのことを言い、今流通しているスチルズーム(レンズ)は、ズームではなく、バリフォーカルレンズというカテゴリーに入る(47頁)。」という一文があり、世の中変わった、と認識を新たにしました。

この記事の定義に従えば、今のデジカメや一般消費者向けのビデオカメラについているレンズは、「ズームレンズ」ではなく、すべて「バリフォーカルレンズ」といわなければなりません。また、この記事において「スチルズーム」とひとくくりに言われて、高価な交換レンズも怪しくなってきました。

写真の写し方として、かつて習ったやり方は、ズームレンズを使うときは「望遠」側でピントを合わせ、それから「ワイド」側に移動して撮影する。というも

のでした。つまりワイド側では物体が小さく見えるので、ピントを合わせにくいから、物体が大きく見える望遠側でピントを合わせておき、それからワイド側に画角を広げて撮影しなさい、ということでした。そのころの一眼レフのズーム式の交換レンズは、確かにそのようなピント合わせの方法が適用できたと思っています。当時のことですがコニカ（今のコニカミノルタ）から「バリフォーカルレンズ」というレンズが発売されたのを覚えています（今調べてみると1970年発表、1972年発売）。当時、このレンズは確かに焦点距離を変えるとピントの位置も変わるということが示されていたように思い、メリットは「安価」ということだったと思います。

思いついて、手元の普及型一眼レフ「キャノンEos Kiss Digital N」と、装着された「Canon ZOOM LENS EF-S 18-55mm 1:3.5-5.6 II USM」で確かめてみると、望遠側で「Auto」でピントを合わせ、ワイド側に画角を広げていくと、心なしかピントが甘いようですが、目がよくないので、確信できません。そこで再度「Auto」で焦点を合わせてみると、レンズがピクッと動きます。やはりズームに伴ってピントは少し移動しているようです。一昔前の交換レンズは「ズームレンズ」という定義に忠実であったと思います。ズームリングを回すとレンズの中のカム機構が動いてレンズの一部を前後に移動させて焦点距離の変更操作に伴ったピント位置の移動をなくするように補正していたと思います。ところが今時の、それも最も普及クラスの交換レンズは、コストの点の制約もありましょうが、補正がそれほど十分でなく、定義がすこし甘くなったのではないかと思います。

今の世の中のカメラは、すべて「Auto」機能がありますから、ズームで焦点距離を変えて、それによってピントがずれても、オートでピントを合わせ直せばいい、と割り切られて、この辺がルーズになっているのではないかと思います。ビデオカメラの場合は、ズーム操作をしながら撮影しても、その間中オートフォーカス機構がしっかり働き続けて連続的にピントを合わせているから、ズーム操作によってずれてきたピントを、オートフォーカス機構が連続的に修正し続けて常に明瞭な映像を撮影できる、ということになっていると思われれます。だから今時のビデオカメラで、マニュアルフォーカスでズーム撮影をしたら、とんでもないボケ映像になってしまうのではないかと思います。